

トロス司教座聖堂発掘中間報告（2012年度の成果を中心に）

浦野 聡（立教大学）

古代にリキアと呼ばれたトルコ共和国西部の地域、地中海岸からおおよそ 50km のところにトロス遺跡がある。私たちは、一昨年から、そこにある古代末期－ビザンツ期の司教座聖堂（翼廊を持つ疑似三分割十字型プラン）の発掘に従事しており、3 シーズン目の 2012 年夏には、身廊の全部と、南側側廊の西側入り口から三分の一の部分、また南側翼廊に続く通路部分の土石除去を終えた。聖堂の梁と屋根を支えた柱と柱頭、また壁体の石材の少なからずは、古代の建築物からの転用材と考えられるが、これらは、昨シーズンに発掘された北側廊部におけるのと同様、ここでも各所に発見された。

身廊では、その中心軸線上、身廊西端の入り口部からも東端のアプシスとの境目からも等距離（12.5m）の場所に、説教壇の基礎をなしていたと考えられる長方形の石材が幅 1.5m 長さ 4m に渡って二～三列に並べられているのが見いだされた。その近くで発見された二重の帯状浮彫囲い線を持つ三角形のパネル断片(24, 24a)と台形をなす帯状浮彫囲い線を持つ四角形のパネル断片(25, 25a-c)は、その手すりの部材であったろう。さらに西から東に向かって掘り進むと、身廊大屋根と翼廊屋根を支えたと見られる方形ブロックを積み重ねたふたつの支柱を結んだ線より 1m アプシス寄りに、4 本、ないし 5 本の、かなり重量感のある柱（直径 0.5m、長さ 3m 以上）が折り重なって発見されたが、その下からは、6 つの奇妙な半円形の彫り込み（直径 0.6m、深さ 4-18cm）を持つ、幅 80 cm ほどの石板が並べて敷かれていた。これらは、テンプロン、もしくはイコノスタシスを形作った柱と、それらを支えたスタイロベイトと考えられる。その周囲からは、アーカンサス模様の縁取りを持つ石材が数多く見つかった。これらは、テンプロン、もしくはイコノスタシスのアーキトレーブの部材であったろう。同様の形状の、しかし意匠は異なるアーキトレーブ／リントル部材には、この聖堂建設、あるいは修築時に刻まれたと考えられる "†AYEΣΘAI I[---]†"（「増大せられること」）の碑銘が見いだされた。この周辺からは、テンプロン、もしくはソレアの手すりであったと思われるかなり大きな 2 枚の石板（高さ 0.8m、幅 1.2-1.3m）が、両面に豊かな浮彫装飾を施されて見つかった。浮彫は、彫られた時期に違いがあった可能性がある。

テンプロンの敷石の東側の祭壇部においては、比較的細い二本の柱（直径 0.4m、長さ 3m）以外、オリジナルな部材や装飾材は発見できなかったが、身廊部と南翼廊部の間を完全に塞ぐ腰高壁が現れた。全体的に豊かな彩色フレスコを施されていたと考えられ、最も東側の壁面には幾何学模様のフレスコが見つかった。アプシスには、シントロノンの痕跡が見つかったが、北半部で深刻な程度に破壊されており、化粧板の痕跡は全体で見つからなかった。アプシスの床には六角形の大石のタイルが敷き詰められていたが、このタイルはアプシス以外の祭壇部からも何枚か見つかったので、祭壇部全体を大理石タイルが覆っていたのかもしれない。南側側廊の内壁下部からは、幾何学模様のフレスコが見つかり、

また、南側側廊から外部への通用門は、ある時期に半分塞がれた痕跡が見つかったが、北側側廊の通用門が完全に塞がれたのとは対照的に、継続して使用され続けたようである。南側廊と身廊の間に見られる列柱の台座は、腰高壁で仕切られていたが、北側廊と身廊の間のそれらとはことなり、通用門に最も近い二カ所で破壊されていて、南側からの身廊部へのアクセスが、ある時期に確保されたようである。南側通用門の外、南側廊に沿う形で、東端にアプシスを持つ小さな付属礼拝堂の痕跡も見つかった。

本報告では、写真や図面によりながら、以上の成果を具体的に紹介する。この聖堂は、多くの聖堂建築におけるのと同様、聖堂としての機能を失った後に、墓所、墓地に転用されており、従って、床面モザイクを破壊して棺が作られている一方、場合によってはより簡易な埋葬形式で床面上からも人骨が発見される。これらの人骨の発掘・保存の方針や、また破壊されたモザイク舗床面の発掘・保存の方針を定めるまで、床上数十cmのレベルで発掘を止めざるをえず、従って、発掘知見は現状では不十分なものに留まらざるを得ないことをあらかじめお断りしておくが、それでも可能な限りありのままを報告することで、諸賢の貴重なご提言を仰ぎたい。